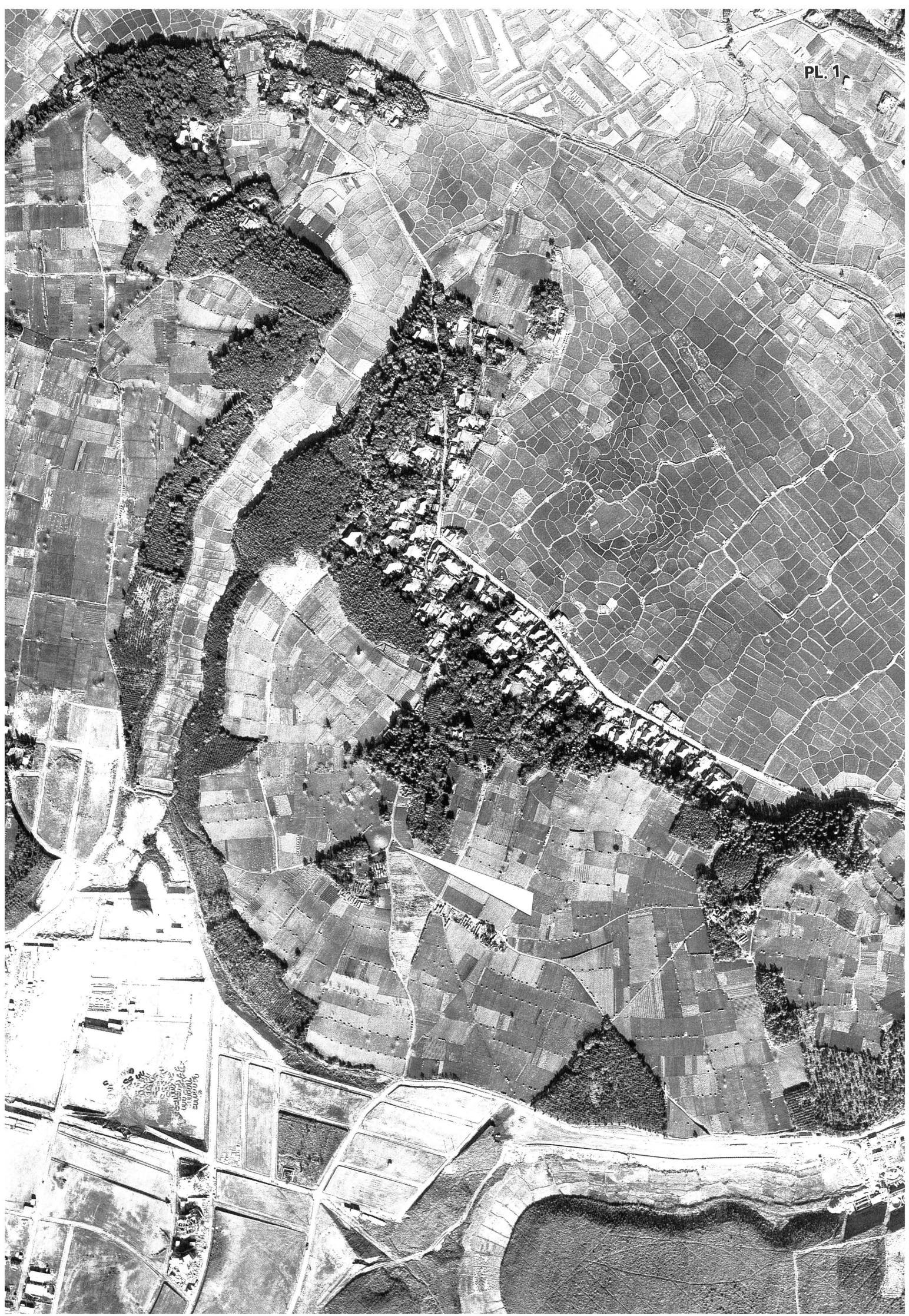


市原市大厩弁天台遺跡

1 9 8 9

辰 巳 鉄 工 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター





(北より)



大厩弁天台遺跡全景

(北より、02号住居跡未掘)

序 文

市原市は、首都圏に位置し、臨海工業地帯の建設を契機として、地域開発が急速に進展しつつあります。この間、開発行為に先行する埋蔵文化財の調査が市内各所で行われておりますが、これらを後世に積極的に保存するとともに、開発との調和をはかることが、行政に課せられた責務であります。

今回、ここに報告する大厩弁天台遺跡は、住宅建設にともない、記録保存を目的として発掘調査が実施されたものであります。

大厩弁天台遺跡では、弥生時代、古墳時代、そして近世にいたる先人の足跡をみることができます。時には農村として、ある時は埋葬の場として、連綿と続く人間の生活の一端を知ることができます。本報告書は、その成果をまとめたものであり、研究者のみならず、広く市民の皆様に活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、今回の発掘調査および、本書の刊行に際し、ご指導、ご協力を頂きました辰巳鉄工株式会社ほか関係諸機関に、心から謝意を表します。

平成元年 3 月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉県市原市大厩字弁天台1236-1番地他
所在の、大厩弁天台遺跡^{おおまやべんでんたい}の調査報告書である。
2. 調査は、辰巳鉄工株式会社による住宅建設に先行し、
記録保存を目的として実施された。
3. 確認調査については、県費補助を受けた市原市の委
託により、また、本調査、整理作業については、辰
巳鉄工株式会社の委託により、財団法人市原市文化
財センターが実施した。
4. 発掘調査、整理作業は、下記のとおり行った。
確認調査 昭和63年3月1日～昭和63年3月31日
担当 清籐一順、田中清美
本調査 昭和63年4月1日～昭和63年4月31日
担当 大村 直
整理作業 昭和63年5月1日～昭和63年5月12日
担当 大村 直
5. 調査対象面積は、3,300㎡であり、うち10%にあた
る330㎡について確認調査を実施し、この結果をう
け、1,200㎡を対象とし、本調査を行った。
6. 本書の執筆、作成は、大村が担当とした。
7. 財団法人市原市文化財センター調査コードは、(セ
74)である。
8. 挿図上、方位は、真北を示す。
9. 遺構断面図、水糸上の数字は、海拔高度を示す。
10. 土器器面色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色
帖1988年版』日本色研事業株式会社発行、を基準と
した。

本文目次

序 文

例 言

財団法人市原市文化財センター組織表

I	調査の経緯と概要	1
1	調査にいたる経緯	1
2	遺跡の位置と環境	1
3	調査の概要	6
4	調査の結果	6
II	遺構と遺物	8
1	大厩弁天台古墳	8
2	竪穴住居跡	12
3	道路跡	21
4	遺構外出土の遺物	21

写真図版

- PL. 1 大厩弁天台古墳と周辺の地形(1961年撮影空中写真)
PL. 2 大厩弁天台遺跡全景(北より)、(北より、02号住居跡未掘)

挿図目次

fig. 1	大厩弁天台遺跡位置図(1/100,000)	1
fig. 2	大厩弁天台遺跡位置図(1/25,000)	2
fig. 3	大厩弁天台遺跡周辺地形図(1/5,000)	3
fig. 4	菊間天神山古墳(北東より)	4
fig. 5	権現山古墳(左)・東関山古墳(右)(北より)	4
fig. 6	姫宮古墳(西より)	4
fig. 7	大厩二子塚古墳(西より)	4
fig. 8	下郷古墳群(北東より)	5
fig. 9	大厩浅間様古墳(縮尺不同)	5
fig. 10	調査対象区と確認調査グリッド、本調査範囲(1/750)	6
fig. 11	大厩弁天台遺跡全体図・大厩弁天台古墳(1/200、1/60)	9・10
fig. 12	大厩弁天台古墳出土土器(1)(1/3)	11
fig. 13	01号住居跡実測図(1/80)	12
fig. 14	01号住居跡(北東より)	13
fig. 15	01号住居跡出土土器(1)(1/3)	14
fig. 16	01号住居跡出土土器(2)(1/3)	15
fig. 17	大厩弁天台古墳(2)・01号住居跡(3)出土土器	16
fig. 18	02号住居跡実測図(1/80)	17
fig. 19	02号住居跡(西より)	18
fig. 20	02号住居跡出土土器(1)(1/3)	18
fig. 21	02号住居跡出土土器(2)	19
fig. 22	道路跡(1/200)	20
fig. 23	遺構外出土遺物(1/3、1/2)	21

表 目 次

tab. 1 01号住居跡貝類 13

財団法人市原市文化財センター組織表

昭和62年度(確認調査)

役 員				調査課			
理 事 長	星 野 一 郎	(教育委員会教育長)		課 長	清 藤 一 順		
副理事長	大 野 皎	(教育委員会教育指導部長)		主 幹	石 田 広 美		
常務理事	岩 見 一 民	(専任)		主 幹	加 藤 正 信		
理 事	滝 口 宏	(早稲田大学名誉教授)		主任調査研究員	宮 本 敬 一		
理 事	寺 村 光 晴	(和洋女子大学教授)		主任調査研究員	米 田 耕之助		
理 事	海 上 信 久	(姉崎神社宮司)		調 査 研 究 員	田 中 清 美		
理 事	飯 山 英 雄	(市企画部長)		調 査 研 究 員	浅 利 幸 一		
理 事	宮 崎 芳 雄	(市総務部長)		調 査 研 究 員	大 村 直		
理 事	地 引 希 壹	(市都市部長)		調 査 研 究 員	近 藤 敏		
理 事	安 藤 隆 一	(市総務部財政課長)		調 査 研 究 員	高 橋 康 男		
監 事	元 吉 末 喜	(市会計課長)		調 査 研 究 員	田 所 真		
監 事	斎 藤 崇 雄	(教育委員会総務課長)		調 査 研 究 員	木 對 和 紀		
職 員				調査研究員(嘱託)	田 中 新 史		
庶務課				調査研究員(嘱託)	半 田 堅 三		
課 長	田 丸 萬 富			事 務 員(嘱託)	高 浦 貞 子		
主 事 補	大 鐘 光 江			調査補助員(嘱託)	田 中 裕 子		
事 務 員(嘱託)	秋 田 晴 美						
事 務 員(嘱託)	石 渡 あゆみ						

昭和63年度(本調査・整理)

役 員				調査課			
理 事 長	星 野 一 郎	(教育委員会教育長)		課 長	石 田 広 美		
副理事長	大 野 義 規	(教育委員会社会教育部長)		主 幹	加 藤 正 信		
常務理事	須 田 昇 三	(専任)		主任調査研究員	宮 本 敬 一		
理 事	滝 口 宏	(早稲田大学名誉教授)		主任調査研究員	田 中 清 美		
理 事	寺 村 光 晴	(和洋女子大学教授)		調 査 研 究 員	浅 利 幸 一		
理 事	根 本 正 夫	(姉崎神社宮司)		調 査 研 究 員	大 村 直		
理 事	飯 山 英 雄	(市企画部長)		調 査 研 究 員	近 藤 敏		
理 事	宮 崎 芳 雄	(市総務部長)		調 査 研 究 員	高 橋 康 男		
理 事	地 引 希 壹	(市都市部長)		調 査 研 究 員	田 所 真		
理 事	安 藤 隆 一	(市総務部財政課長)		調 査 研 究 員	木 對 和 紀		
監 事	元 吉 末 喜	(市会計課長)		調査研究員(嘱託)	田 中 新 史		
監 事	河 野 徳 三	(教育委員会総務課長)		調査研究員(嘱託)	半 田 堅 三		
職 員				事 務 員(嘱託)	高 浦 貞 子		
庶務課				事 務 員(嘱託)	田 中 裕 子		
課 長	田 丸 萬 富						
主 事 補	大 鐘 光 江						
事 務 員(嘱託)	秋 田 晴 美						
事 務 員(嘱託)	石 渡 あゆみ						

I 調査の経緯と概要

1 調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、千葉県市原市大厩地先における、住宅建設に先行して実施されたものである。建設工事の着工に先がけ、辰巳鉄工株式会社代表取締役山本正男より同地区内における埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出され、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、辰巳鉄工株式会社の三者による協議の結果、記録保存とする方針が決められた。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、対象区3,300㎡について実施された。確認調査の結果、古墳周溝等が検出され、この結果をうけ、対象区内1,200㎡について本調査が実施されることとなった。

2 遺跡の位置と環境

大厩弁天台遺跡は、地籍上、市原市大厩字弁天台1236-1番地他に所在している。

市原市は、房総半島の中央部より東京湾にいたる南北約35mにおよぶ細長い市域を形成している。市域には、そのほぼ中央部に養老川が、また北辺部には村田川が流れ、その河口域には氾濫平野が広がっている。このうち、村田川は、別名境川とも称され、古くは上総と下総を区分し、現在も市原市と千葉市を区分する一つの境界となっている。本遺跡はその南岸の台地上に位置しており、標高26～27m、水田面との比高差は約17mを測る。全体としてやや緩斜面にあるが、台地縁辺部より約200m

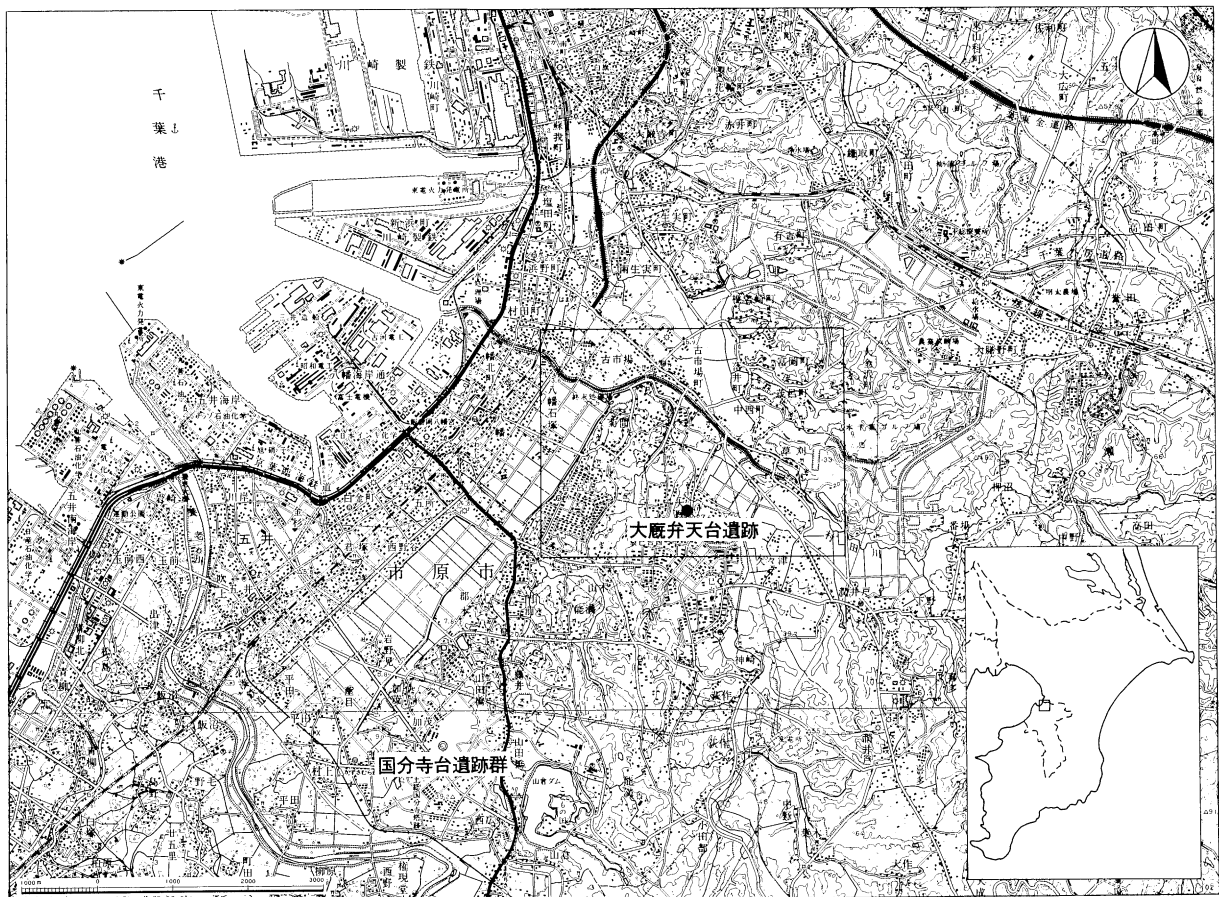
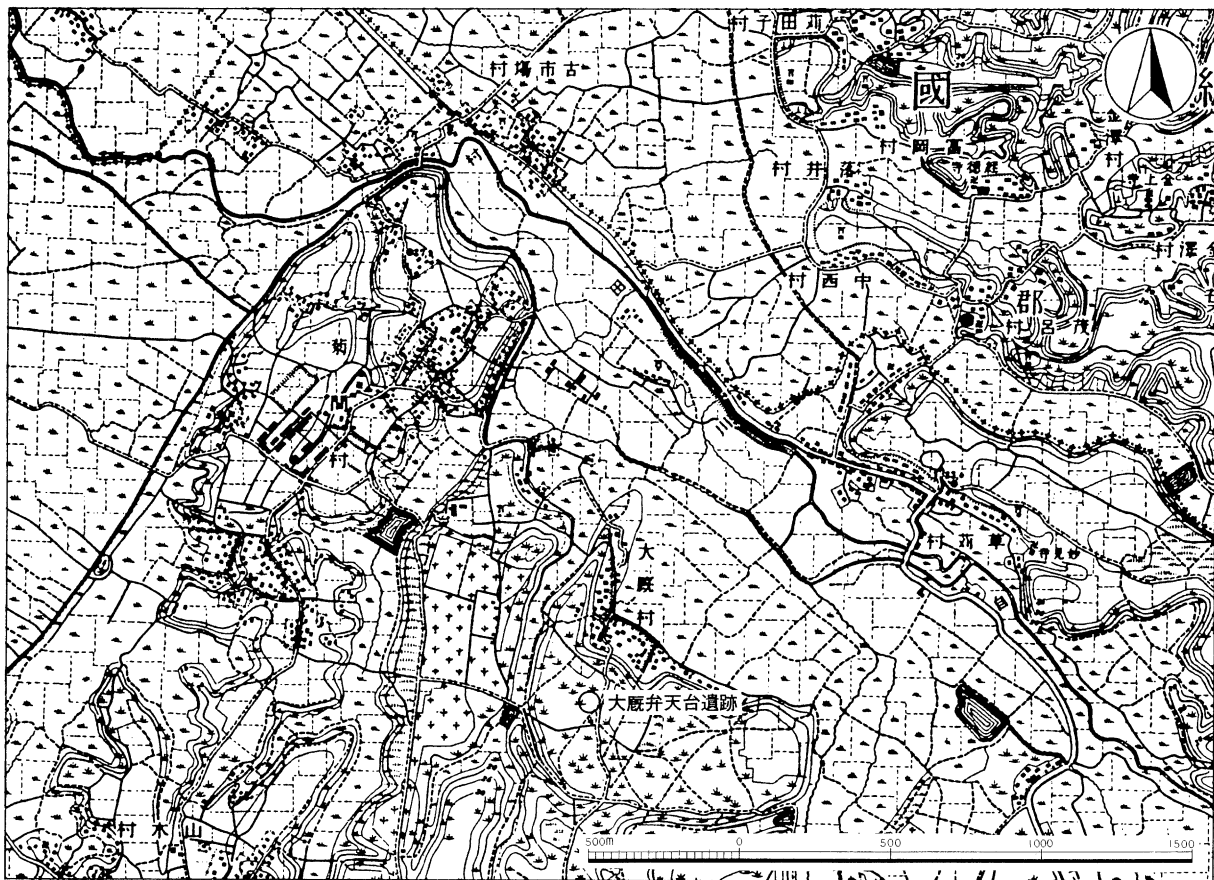


fig. 1 大厩弁天台遺跡位置図(1/100,000)(国土地理院発行地形図)



(明治16年測量迅速測図)

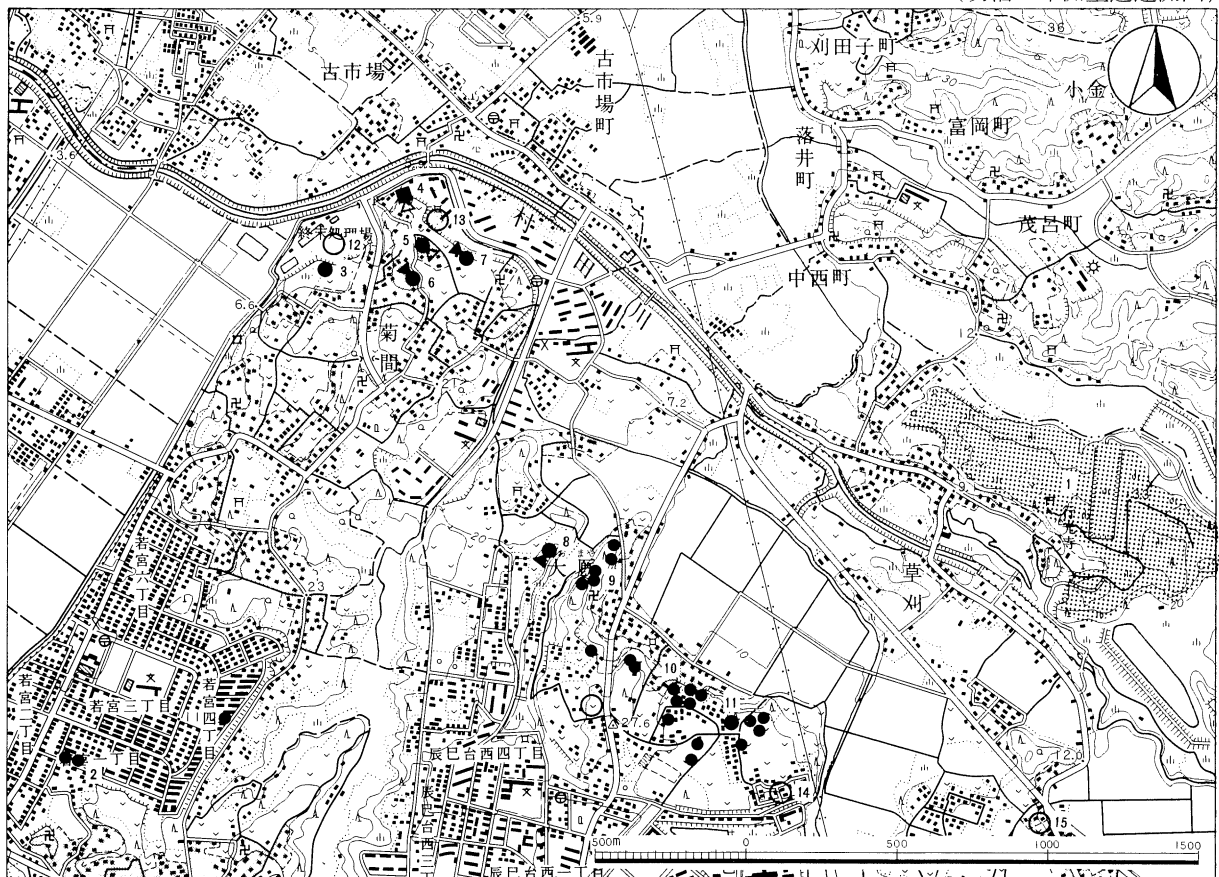


fig. 2 大膳弁天台遺跡位置図(1/25,000)

(国土地理院発行地形図)



fig. 4 菊間天神山古墳(北東より)

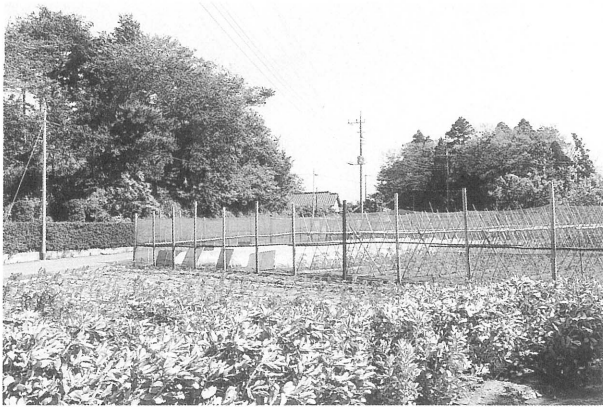


fig. 5 権現山古墳(左)・東関山古墳(右)(北より)



fig. 6 姫宮古墳(西より)



fig. 7 大厩二子塚古墳(西より)

内側に入った位置にある。遺跡は、市遺跡分布地図⁽¹⁾では、大厩遺跡群(遺跡番号934)、大厩弁天台古墳は、大厩古墳群(大厩川上台古墳群)(遺跡番号935-⑭)として登録されているが、今回字名を付し遺跡名、古墳名としておく。ただし、とくに古墳については、周辺に古墳群が形成されており、将来統一した名称を付す必要もあろう。なお、県遺跡分布地図⁽²⁾では、大厩弁天台遺跡(遺跡番号614)として記載されている。

村田川流域では、とくにその北岸において、千葉東南部ニュータウン、千原台ニュータウンなど、大規模な土地区画整理事業が実施され、これに伴う発掘調査によって、草刈遺跡(fig. 2-1)⁽³⁾ほか当該地域において、いわば拠点的にも考えられるような遺跡群の内容が明らかになりつつある。これに対して、村田川南岸地域では、辰巳台、若宮地区などはやくから宅地開発が行われてきたものの、発掘調査が不十分であったこともあり、遺跡群の動態はかならずしも明瞭ではない。しかし菊間手永遺跡(fig. 2-12)⁽⁴⁾、菊間遺跡(fig. 2-13)⁽⁵⁾、大厩遺跡(fig. 2-14)⁽⁶⁾、西山遺跡(fig. 2-15)⁽⁷⁾、では、いずれも環濠をともなう集落跡が検出されているなど、とくに弥生時代中期以降、養老川北岸における国分寺台にかけての地域は、南関東地方でも有数の遺跡群が形成されたといっても過言ではないであろう。

古墳についても、径44mを測る円墳の菊間天神山古墳(fig. 2-3、fig. 4)⁽⁸⁾、後方部一辺38mの前方後方墳と推定される新皇塚古墳(fig. 2-4)⁽⁹⁾、復元全長75mを測る前方後円墳の権現山古墳(fig. 2-5、fig. 5)、全長61mの前方後円墳である東関山古墳(fig. 2-6、fig. 5)、全長51mの前方後円墳である姫宮古墳(fig. 2-7、fig. 6)を主墳とする菊間古墳群は古くより著名である。また、1984年に調査

が実施された大厩浅間様古墳(fig.2 -11、fig.9)⁽¹⁰⁾は、径約45mを測る前期の円墳であり、中央1号主体部より、珠文鏡1、石釧1、刀子1、瑪瑙製勾玉2、琥珀製勾玉7、琥珀製棗玉4、琥珀製小玉19、管玉53、ガラス製勾玉1、ガラス製小玉31などが出土している。他に前期にさかのぼる可能性があるものとして、大厩二子塚古墳(fig.2 - 8、fig.7)があり、全長63mを測る前方後円墳である。大形古墳としては、杉山古墳(前方後円墳、全長60m)、長者塚古墳(円墳、径38m)、1988年に調査が実施され、円筒埴輪列が検出された小谷1号墳(前方後円墳、全長約50m)⁽¹¹⁾などが、さらにこの上流域にわたって点在しているが、墳丘測量すら行われていないものも多く、その動態を問題とするには、今後の資料收拾が不可欠である。

中小古墳群については、その遺存状態はかならずしも良好であるとはいいがたい。大厩古墳群(fig.2 - 10)についても1961年撮影の空中写真(PL . 1)では、大厩弁天台古墳を含め周囲に点在する古墳を視認することが可能であり、分布地図もこれによる点が多い。現状では本遺跡東側駒形神社境内(駒形古墳群)など一部が確認できるにすぎない。また菊間遺跡、菊間手永遺跡においても、周溝部の検出例がみられるが、上記首長墓群を含めた構成状態を復元することは容易ではない。そのなかで下郷古墳群(かねほり塚古墳群)(fig.2 - 9、fig.8)、村田川支

流、神崎川東岸の潤井戸天王台古墳群は比較的遺存状態が良好であるといえよう。なお、発掘調査が実施されたものとしては、山木古墳群がある⁽¹²⁾。また村田川北岸草刈古墳群⁽¹³⁾では、50基をこえる大小古墳群が確認されており、その一部に対して調査が実施されている。

本遺跡と同時期の集落跡の調査例としては、村田川北岸において草刈遺跡、草刈六之台遺跡⁽¹⁴⁾、川焼台遺跡⁽¹⁵⁾など比較的大規模な集落跡が検出されているが、南岸地域では、大厩遺跡、西山遺跡、下鈴野遺跡⁽¹⁶⁾など、現状ではいずれも小規模で非継続的なものが多い。なお本遺跡は、西山遺跡報告において、弥生時代中期後半期を中心とするとして紹介されているが、今回の調査区からはこれを確認することはできなかった。ただし、前述したように、今回の調査地点は、台地端よりやや奥まった位置にあり、集落としてはその縁辺部にあたる可能性が高い。



fig. 8 下郷古墳群(北東より)

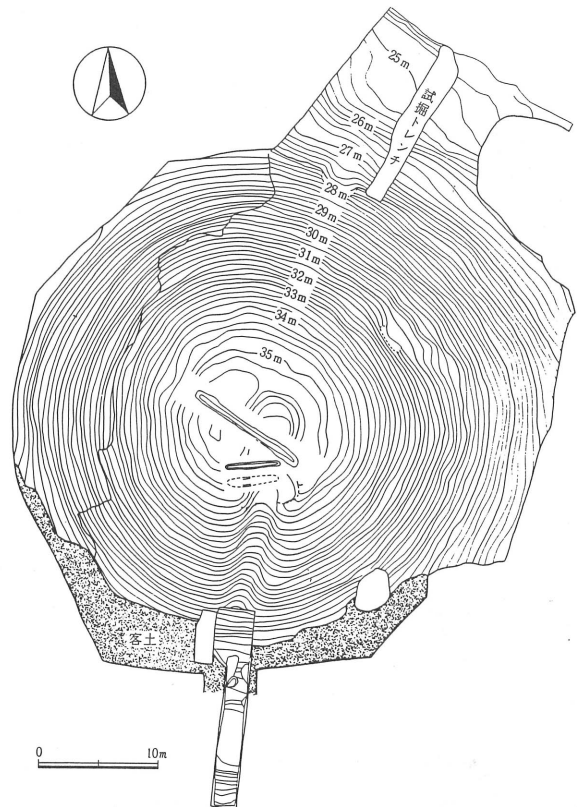


fig. 9 大厩浅間様古墳(縮尺不同)



fig. 10 調査対象区と確認調査グリッド、本調査範囲(1/750)

3 調査の概要

確認調査は、任意方向(南北 $N-5^{\circ}42'40''-E$)に10m×10mの方眼網を設け、これを基点として2×4mの調査グリッドを設定した。グリッドは状況に応じ拡張し、調査対象範囲の10%にあたる330㎡について発掘調査を実施した。この結果古墳周溝、道路跡が確認され、1200㎡について本調査を実施することとなった。ただし、この確認調査の段階では、住居跡は未検出であった。なお対象区内周溝南端部分については、出入口部分にあたるため、本調査範囲から除外された(fig. 10)。

本調査は、確認調査にもとづくグリッド方眼を使用した

が、本報告では公共座標により表示しておく。遺跡は調査前にすでに整地された状況にあり、古墳についても、確認調査の結果盛土の遺存はまったく認められなかったため、表土の除去はバックホウを使用した。なお、古墳墳丘の削平については、今回の造成に伴うものではない。その正確な状況を確認することはできなかったが、ほぼ10年前に削平されたとのことである。

4 調査の結果

今回の発掘調査において、古墳周溝(大厩弁天台古墳)、竪穴住居跡2軒、道路跡2条以上が検出され、他に、道路跡に方向が対応する畝状の遺構も年代的にさかのぼる可能性も考えられる。全体的にバックホウによる爪痕が残されていたものの、ローム面におよぶ削平は部分的であった。

註

- (1) 市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 — 北部編 — 』
- (2) 千葉県教育委員会 1987『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) — 市原市・君津市・長生郡 — 』
- (3) 三森俊彦・小久貫隆史ほか 1983『千原台ニュータウンⅡ 草刈遺跡A区(第1次調査) 鶴舞古墳』財団法人千葉県文化財センター
 古内茂・高田博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』財団法人千葉県文化財センター
 財団法人千葉県文化財センター 1982『草刈遺跡(C区)』『草刈遺跡(D区)』『千葉県文化財センター年報 No.8』
 財団法人千葉県文化財センター 1983『草刈遺跡(C区)』『草刈遺跡(D区)』『千葉県文化財センター年報 No.9』
 財団法人千葉県文化財センター 1984『草刈遺跡(F区)』『草刈遺跡(D区)第三次』『草刈遺跡(E区)』『千葉県文化財センター年報 No.10』

- 財団法人千葉県文化財センター 1985「草刈(F区)遺跡」『千葉県文化財センター年報 No.11』
- 財団法人千葉県文化財センター 1986「草刈G区遺跡」『千葉県文化財センター年報No.12』
- (4) 近藤敏 1985「菊間手永遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』
- (5) 斎木勝 1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
- (6) 三森俊彦・阪田正一 1974『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社
- (7) 鈴木英啓 1986「潤井戸西山遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第9集
潤井戸天王台古墳群など、この地区の古墳群については同書にくわしい。
- (8) 註(4)
- (9) 註(5)
- (10) 浅利幸一 1985「(大厩)浅間様古墳」『市原市文化財センター年報 昭和59年度』
- (11) 高橋康男 1989「潤井戸小谷1号墳」『第4回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨 昭和63年度』
- (12) 市毛勲・滝山昌彦 1967「市原市周辺の遺跡」『市原市文化財調査報告書第3冊』土師書院
- (13) 財団法人千葉県文化財センター 1981「草刈古墳群」『千葉県文化財センター年報 No.7』
財団法人千葉県文化財センター 1982「草刈古墳群」『千葉県文化財センター年報 No.8』
財団法人千葉県文化財センター 1983「草刈古墳群」『千葉県文化財センター年報 No.9』
財団法人千葉県文化財センター 1984「草刈遺跡(F区)」『千葉県文化財センター年報 No.10』
財団法人千葉県文化財センター 1985「草刈古墳群(23・24・25・26・27号古墳)」『千葉県文化財センター年報 No.11』
- (14) 財団法人千葉県文化財センター 1980「草刈六之台遺跡」『千葉県文化財センター年報 No.6』
財団法人千葉県文化財センター 1981「草刈六之台遺跡(第2次)」『千葉県文化財センター年報 No.7』
財団法人千葉県文化財センター 1982「草刈六之台遺跡(第3次)」『千葉県文化財センター年報 No.8』
- (15) 財団法人千葉県文化財センター 1983「草刈古墳群」『川焼台遺跡』『千葉県文化財センター年報 No.9』
財団法人千葉県文化財センター 1984「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報 No.10』
財団法人千葉県文化財センター 1985「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報 No.11』
財団法人千葉県文化財センター 1986「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報 No.12』
- (16) 大村直 1987「下鈴野遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第16集

Ⅱ 遺構と遺物

1 大厩弁天台古墳(fig. 11・12・17)

遺 構 全体のほぼ1/2弱を調査することができた。円墳であると推定される。周溝のみを検出。盛土、主体部等はすでに削平され、確認することはできなかった。

規模は、調査範囲内確認値では、確認面外径で31.52m、確認面内径で21.30m、周溝底面内径で22.71mを測る。復元値では、確認面外径32.5m、確認面内径22.7m、周溝底面内径23.9m程度と考えられる。周溝断面形は、底面が平坦なほぼ逆台形を呈し、内側がやや緩やかに立ち上がる。周溝規模は、断面a-a'を基準とした場合、確認面幅5.05m、現地表面よりの深さ0.77m、確認面よりの深さ0.42m、断面b-b'やや西側で、確認面幅6.14m、現地表面よりの深さ0.77m、確認面よりの深さ0.65m、断面c-c'で確認面幅5.07m、確認面よりの深さ0.39m、断面d-d'で確認面幅6.14m、確認面よりの深さ0.47mを測る。周溝はほぼハードローンを約20～30cm掘りぬき、周溝底面標高は最深部で27.05mを測る。

土層は、1・2・3層は整地層であり、北側周溝にみられるイモ穴等は、この整地層下にある。1層は、暗褐色土層であり、しまりが強くロームブロック、大小の礫を混合する。2層は、ロームを主体とする。3層は、褐色土層であり、大小ロームをブロック状に混合する。4層は、明褐色土層であり、しまりがなく、全体に粒状。5層は、畝状部分であり、黒褐色を呈し、しまりがなく。ローム粒を若干混合する。6層は、黒褐色均質土である。7層は、道路部分に対応する。暗褐色を呈し、きわめて硬質である。8層は、暗黄褐色土であり、ロームブロック、ローム粒を多量に混合する。9層は、8層に似るがやや明色を呈す。ロームブロックを主体とする。10層は、道路部分に対応する。黒褐色を呈し、きわめて硬質である。11層は、やや青みがかった黒色砂質土であり、江戸時代宝永期の火山灰と考えられる。12層は、道路部分に対応する。黒褐色を呈し、きわめて硬質である。13層は、黒褐色を呈し、局部的にロームブロックを混合する。14層は、明黒褐色均質土である。15層は、明黒褐色土であり、しまりがなく。16層は、黒褐色均質土である。しまりが強く、緻密である。17層は、明黒褐色土であり、スコリアを多量に混合し、全体に粒状である。18層は、明黒褐色を呈し、まだら状に褐色ブロックを混合する。19層は、暗黄褐色土であり、ロームブロック等全体に粒状、ブロック状である。20層は、黒褐色を呈し、ロームブロックを全体に混合する。21層は、ローム、黒色粒を全体に混合する。21層は、20層に似るが、黒色土強。22層は、20層に似るが、ローム強。23層は、明黒褐色土を地層とし、ロームを混合する。全体に粒状を呈す。24層は、黄褐色土であり、ロームブロックを主体とする。

遺 物 周溝内より出土した土器のみであり、埴輪等はまったく出土していない。遺構の性格から古墳との共伴関係は確実にとはとらえることはできないが、挿図に示したものは、7が集落に関連するものと考えられる他は、時期的にも安定しており、本古墳に伴う可能性が強い。また、須恵器をのぞき、赤彩されたものが多数を占める点も、これを傍証するものと考えられる。1・6は、底面より約10cm上、9は、断面c-c'19層、道路硬質面下より出土した。また、5・10・12・13は、断面b-b'17層より出土した。

1は、土師器杯形土器であり、約1/2を遺存する。口径14.5cm、最大径14.9cm、器高4.7cm測る。

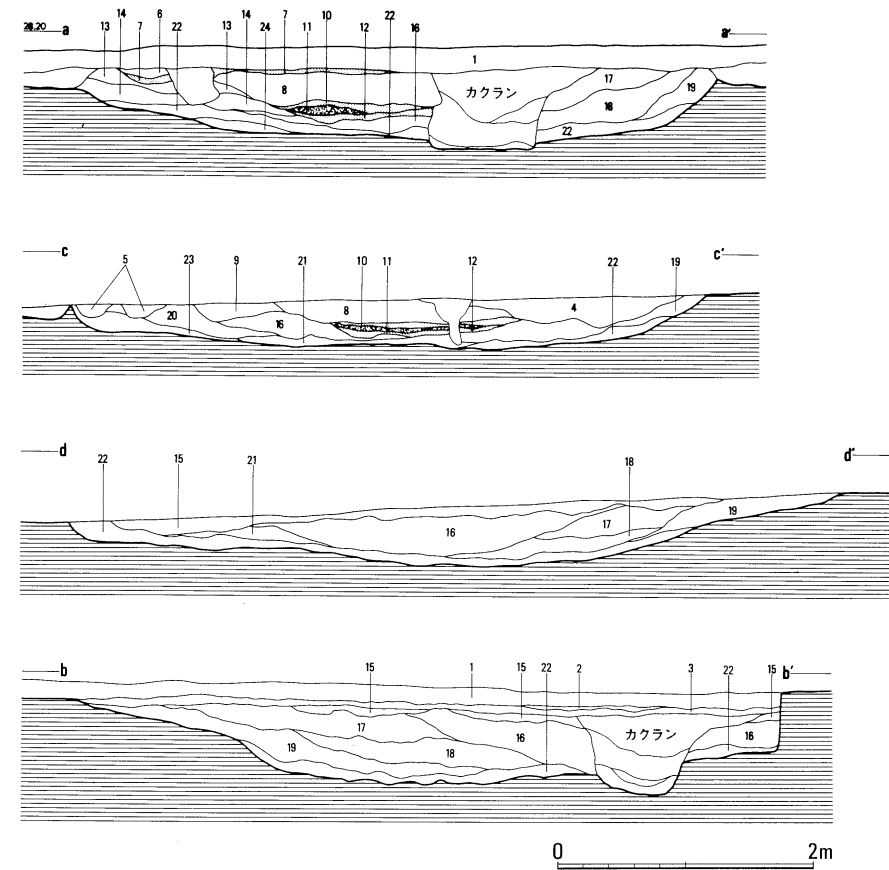
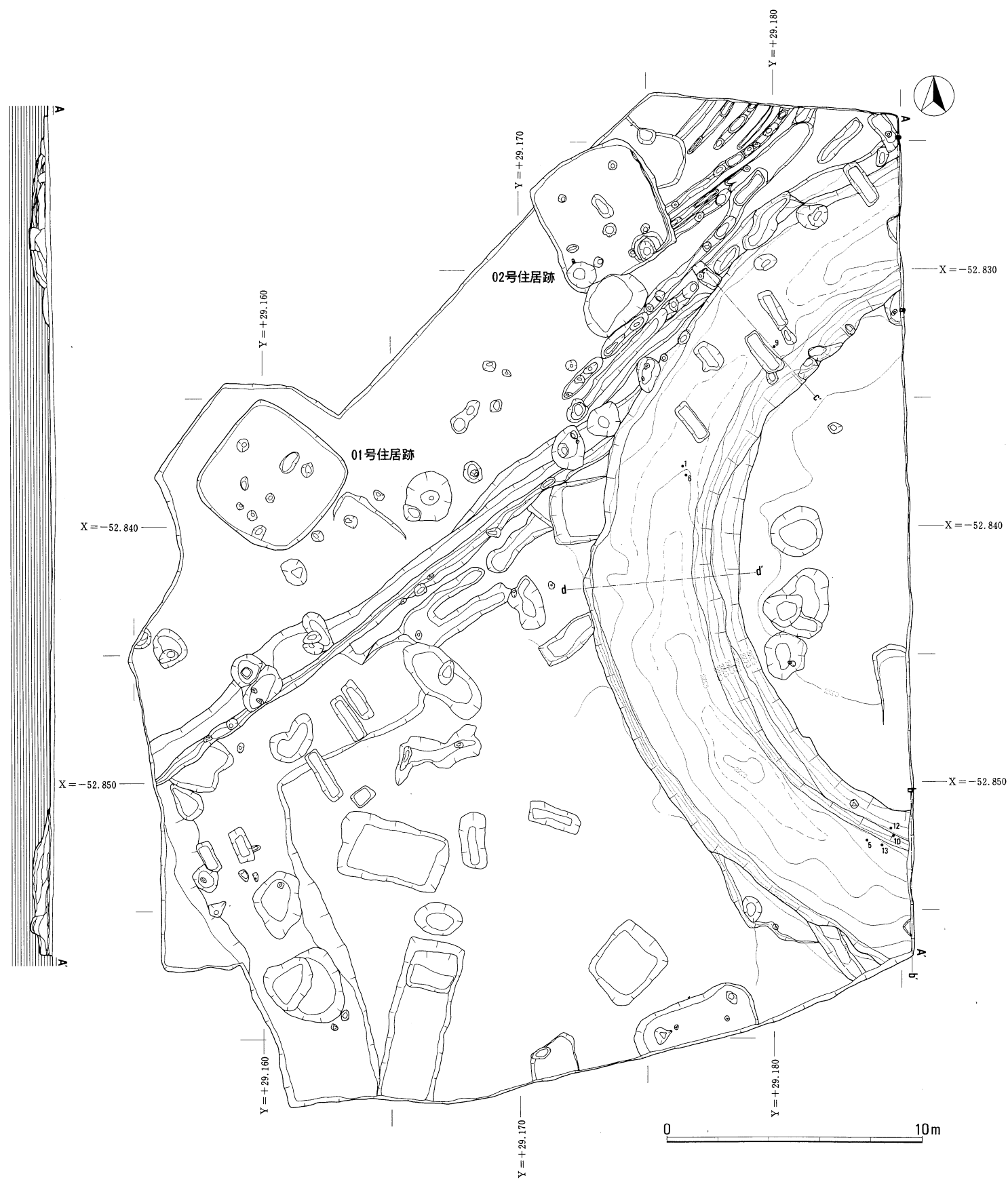


fig. 11 大厩弁天台遺跡跡全体図・大厩弁天台古墳(1/200, 1/60)

口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリというよりはヘラナデによる。内外面は赤彩されている。胎土は緻密、器面色調は赤色を呈す。2は、土師器杯形土器であり、口縁部1/7を遺存する。口径はやや不確実であるが13.3cmを測る。体部内外面はヘラナデにより整形され、赤彩されている。胎土は緻密、器面色調は赤橙色を呈す。3は、土師器甕形土器であり、口縁複合部約1/8を遺存する。口縁最大径は22.4cmを測る。内外面ともナデ調整によるが、複合部外面には指頭痕を残す。赤彩されている。胎土には白色、赤色細粒を多量に含む。器面色調は赤色である。4は、土師器高杯形土器であり、杯部下半1/8周を遺存する。現存高は2.7cmを測る。内外面ともナデにより、また赤彩が施される。胎土は白色細粒を若干含み緻密。器面色調は淡赤橙色を呈す。5は、土師器高杯形土器であり、杯部下半のみ遺存する。現存高は3.2cmを測る。器面外面はヘラナデののち粗いミガキが施される。内面は不明確であるがヘラナデか。胎土は緻密であり、器面色調は外面が赤橙色、内面がにぶい橙色である。6は、土師器高杯形土器である。脚部柱状部のみ遺存する。現存高は5.4cmを測る。内外面ともヘラナデにより調整され、赤彩される。胎土は細粒を多量に含み、器面色調は、外面がにぶい赤橙色、内面が淡赤橙色を呈す。7は、高杯形土器であり、脚部上半のみ遺存する。現存高は、4.4cmを測る。脚部外面、杯部内面は、ミガキ、赤彩が施される。脚部には3孔を穿つ。胎土は長石他大小砂粒を混合する。器面色調はにぶい橙色を呈す。8は、土師器底部片であり、約1/2を遺存する。器種は特

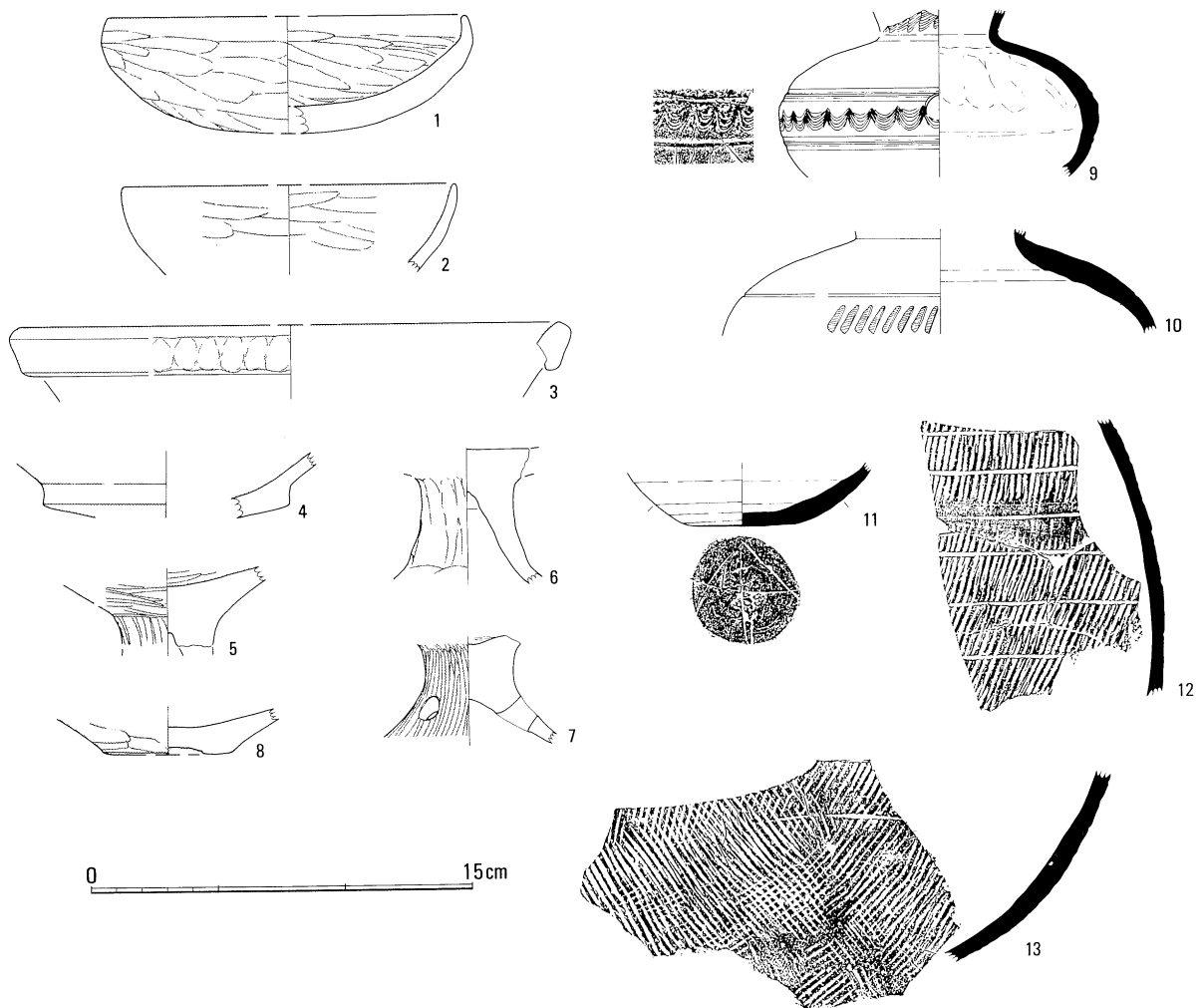


fig. 12 大厩弁天台古墳出土土器(1)(1/3)

定できない。底径は、5.2cmを測る。内外面ともヘラナデが施され、外面は赤彩される。底部は凹底となり、同様に赤彩される。胎土は緻密であり、白色細粒を含む。器面色調は、外面が明赤褐色、内面が暗赤灰色を呈す。9は、須恵器礫形土器であり、胴部上半2/3を遺存する。胴部最大径12.8cm、現存高は6.7cmを測る。胴部中位には2本1単位、上下2単位の沈線をもち、その間および頸部に7本からなる櫛描文を描く。施文方向は反時計回転である。胴部上半には自然釉が全体に付着している。内面胴部上半には指頭痕がみられる。胎土は緻密であるが黒色粒が認められる。器面色調はオリーブ灰色を呈す。10は、須恵器礫形土器であり、胴部上半1/5を遺存する。現存高は4.2cmを測るが、径についてはやや不確実である。外面には全体に自然釉が付着し、不鮮明であるが、沈線と櫛描き列点文が認められる。胎土は緻密であるが白、黒色粒を若干混合する。器面色調は、外面が淡黄色、内面が灰色を呈す。11は、器種を特定することができない。底径4.2cmを測る。ロクロ調整、底部および底部下半は時計回転の回転ヘラケズリが施される。胎土は長石他細粒を含み、器面色調は灰白色を呈す。12・13は、須恵器甕形土器であり、同一個体と考えられる。外面胴部は縦方向、底部にかけては格子状にタタキ目がみられ、また沈線を加える。内面はヘラナデ整形による。胎土は緻密であるが白、黒色粒を若干混合する。器面色調は灰色である。

2 竪穴住居跡

01号住居跡(fig. 13～17)

遺 構 住居竪穴の平面形は、やや隅丸の方形を呈し、長軸4.89m、短軸(主軸)4.75mを測る。面積は、確認面で21.21㎡、床面で18.92㎡を測る。主軸方位は、N-39° - Eである。壁高は、50cm程度を残す。床は貼り床であり、中央部を除きあまり硬質ではなかった。炉は、主軸線上出入口部より

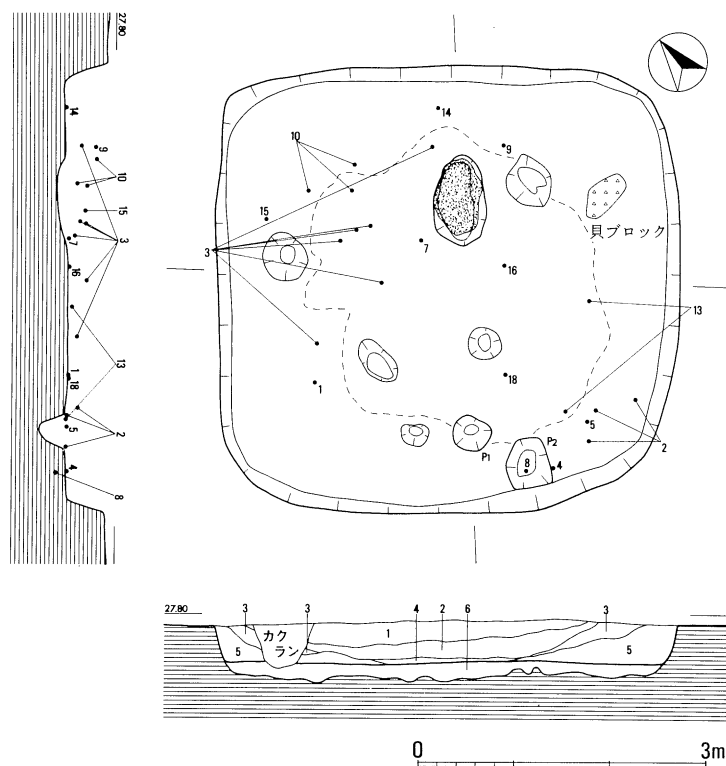


fig. 13 01号住居跡実測図(1/80)

り奥側にあり、平面は楕円形を呈す。規模は、平面96×56cm、深さ約11cmを測る。底面はよく焼けていた。支柱穴は検出することができなかった。P₁は、出入口部の梯子穴と考えられているものであり、深さ床面より35cmを測る。P₂は、いわゆる貯蔵穴であり、平面52×45cm、深さ23cmである。周溝は検出することができなかった。覆土土層は、1層は、黒褐色土であり、全体にまだら状に褐色土を混合する。2層は、1層と同質であるがやや明色を呈す。3層は、暗褐色を呈し、全体に粒状であった。4層は、3層に似るが、均質的でしまりが強い。5層は、暗黄褐色土であり、粒状にロームを混合する。6層は、貼り床部分にあたり、暗



fig. 14 01号住居跡(北東より)

は、台付の甕形土器であり、胴部一部をのぞきほぼ完存する。口径18.1cm、器高30.0cm、胴部最大径24.0cm、脚台部径9.5cmを測る。容量は5,750ccである。口唇部は面取り無文であり、口縁部外面は粘土紐積み上げ痕を部分的に残し、ヘラ先による深いナデを加える。口縁部内面、胴部内外面、脚台部内面はヘラナデによる。脚台部外面は7本/cmの縦方向のハケを施し、接合部にヨコナデを加える。胴部下半は、2次的な火熱により摩滅している。胎土は大小砂粒を含み砂状である。器面色調は橙色を呈す。2は、甕形土器であり、体部上半1/5を遺存する。口径17.2cm、胴部最大径22.2cmを測る。口唇部には、上、横方向からの押捺、体部内外面はヘラナデによる。ミガキを加えている可能性もある。胎土は長石他白色細粒を多量に含む。器面色調は明赤褐色である。3は、甕形土器であり、胴部4/5を遺存する。器面は剥落により不明確な部分がみられる。胴部最大径は22.6cmを測る。口縁部外面は粘土紐積み上げ痕を残し、現存部では4段が確認できる。胴部外面はヘラナデにより、内面はミガキが施される。胎土は細粒を多量に含む、器面色調外面は黒褐色、内面は明赤褐色である。4は、甕形土器であり、底部および口縁部、胴部一部を欠損する。口径16.7cm、胴部最大径は21.3cmを測る。口唇部は丸くつくられ、頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はヘラナデによる。胎土は大小砂粒を多量に含む、器面色調は橙色を呈す。ただし、胴部中位やや下より口縁部にかけて黒色化している。5は、甕形土器であり口縁部1/3、胴部下半を欠損する。口径23.4cm、胴部最大径31.7cmを測る。口唇部は面取りされ、下端は若干肥厚する。口唇部は、ヨコナデ、口縁部外面は指ナデ、内面はヘラナデによる。胴部外面は7本/cmのハケ、内面はヘラナデが施される。胎土は長石他若干の白色粒を含むものの緻密、器面色調は明黄橙色である。6は、

黄褐色を呈す。大小ロームブロックを主体とする。なお、床より約5cm間層をはさみ、貝ブロックの堆積が認められた。その組成は表に示しておく(tab. 1)。

遺物 比較的まとまって土器が出土している。1・2・4・5・7・13・14・16・17・18・19が床面より、8が貯蔵穴内覆土より、他が覆土より出土したものである。編年上4・5の甕形土器に対して1は定性的に先行する内容を備えているが、2・3をふくめ、一括資料として排除されるものではない。1

貝種	点数	重さg
シオフキ	163(82)	941.6
ハマグリ	81(41)	814.5
アサリ	38(19)	201.6
マテガイ	26(13)	14.1
カガミガイ	1(1)	21.7
カキ	43(22)	139.2
小計	352(178)	2132.7
イボキサゴ	367	629.5
ウミニナ	24	16.5
アラムシロ	5	1.4
ツメタガイ	3	11.7
タニシ	10	5.1
小計	409	664.2
合計	761	2796.9

tab. 1 01号住居跡貝類

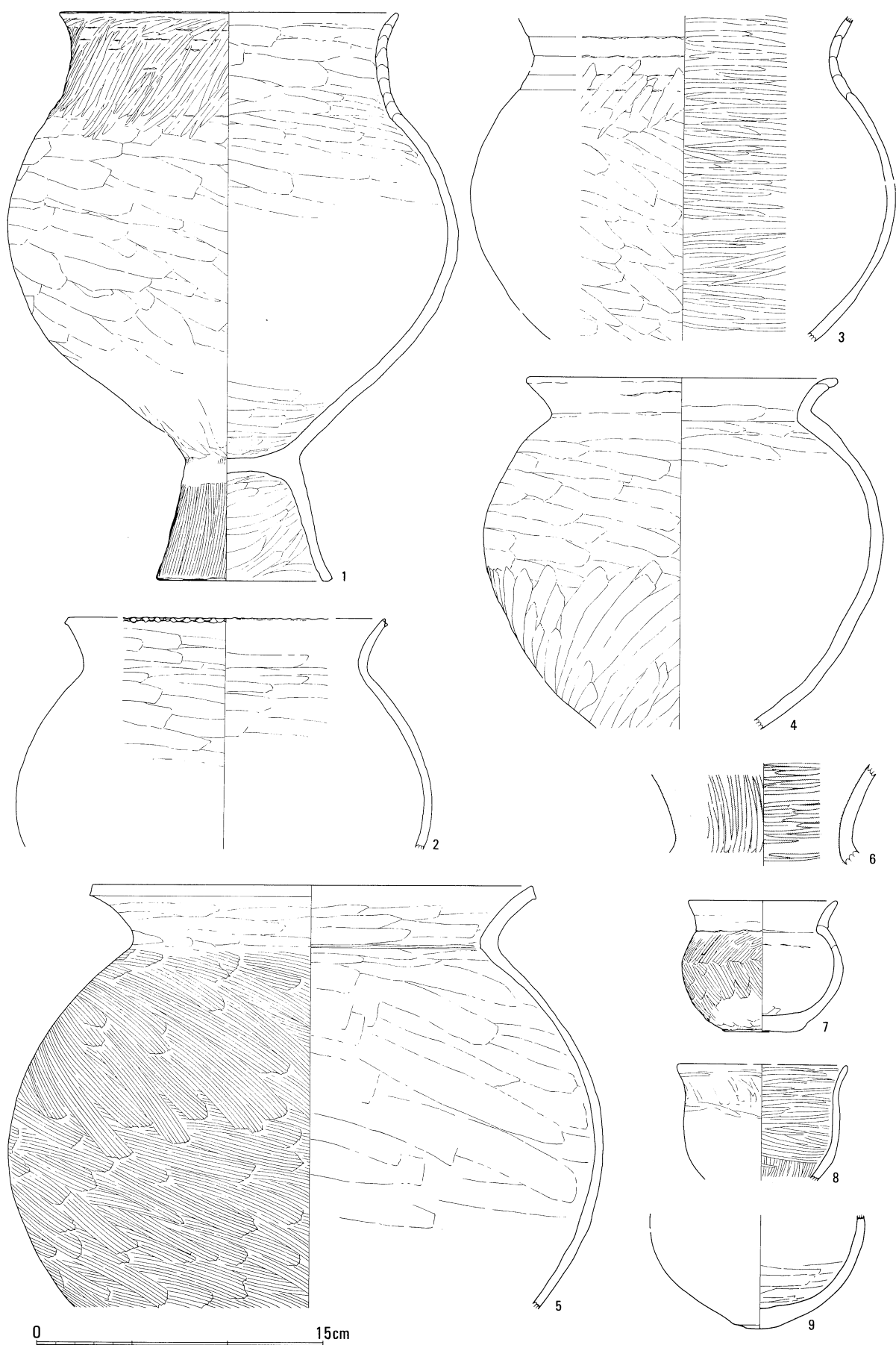


fig. 15 01号住居跡出土土器(1)(1/3)

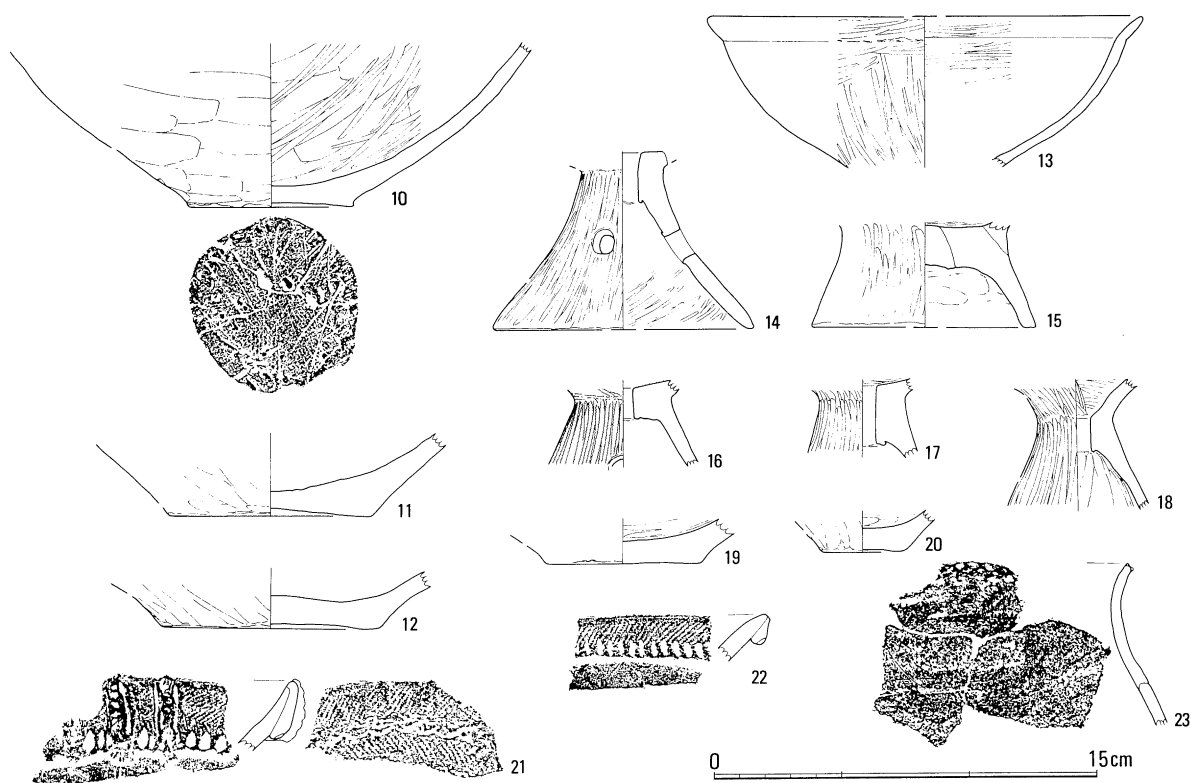


fig. 16 01号住居跡出土土器(2)(1/3)

壺形土器であり、頸部1/3を遺存する。現存高5.5cmを測る。器面調整はミガキによる。内外面とも赤彩が施される。胎土は長石、石英他細粒を多量に含む。色調は明赤褐色である。7は、小形の壺形土器である。完存する。口径8.0cm、器高7.0cm、胴部最大径8.6cm、底径4.3cmを測る。口縁部は胴部に対して肥厚させ複合状となり、ヨコナデが施される。胴部外面はヘラナデののち8本/cmのハケ、内面はナデによる。底部は若干凹底となる。胎土は長石他細粒を多量に含む、器面色調は橙色を呈す。8は、小形の壺形土器であり、体部上半1/3が遺存する。口径9.1cmを測る。外面整形痕はやや不明瞭であるが、ヘラナデであろうか。内面は全体にミガキが施される。胎土は緻密、器面色調は橙色を呈す。9は、埴形土器であろうか。現存高6.1cmを測る。底部は剥落により不明確であるが、尖り底、ないしは小さな平底と考えられる。外面の整形はミガキか。内面はヘラナデによる。胎土は緻密であり、器面外面の色調は橙色、内面は明褐灰色を呈す。10は、甕形土器と考えられ、底部および胴部下半1/4を遺存する。底径6.6cmを測る。胴部外面はハケののちヘラナデであり、さらに粗いミガキを加えている可能性もある。内面はヘラナデののち粗いミガキを加える。底部には木葉痕を残す。胎土は全体に緻密であり、器面色調は外面が橙色、内面がにぶい赤橙色である。11は、甕形土器か。底径8.0cm測る。底部は1/2を遺存する。外面はヘラナデ、内面は剥落により不明である。胎土は長石、赤色粒を多量に含む。色調は黒色である。12は、壺形土器か。底部のみ遺存する。底径8.7cmを測る。内外面ともヘラナデによる。胎土は長石、石英、角閃石などを含み緻密。器面色調はにぶい橙色を呈す。13は、高杯形土器である。杯部1/8を遺存する。口径は17.4cmと復元したがやや不確実である。内外面ともヘラナデののち粗いミガキを施す。胎土は大小砂粒を含み砂状である。器面色調は外面がにぶい橙色、内面が橙色を呈す。14は、器台形土器である。器受部、脚部下半2/3を欠損する。脚端部径10.4cmを測る。器受部底面に貫通孔、脚部に3ないしは4孔を穿つ。外面はミガキ、内面はヘ



fig. 17 大厩弁天台古墳(2)・01号住居跡(3)出土土器

ラナデののち下半部に粗いミガキを施す。胎土は赤色粒を多量に含む。色調は明赤褐色を呈す。15は、脚台部である。器種は特定できない。脚部1/5を遺存する。脚端部径8.9cmを測る。脚部外面および体部内面はミガキ、脚部内面は指ナデによる。ハケは認められない。胎土は長石、赤色粒他大小砂粒を多量に混合する。器面色調は橙色を呈す。16は、器台形土器と考えられる。脚部上半のみ遺存して

いる。現存高は3.5cmを測る。器受部底面に貫通孔、脚部に小孔を穿つ。孔数は不明。脚部外面、器受部内面はミガキ、赤彩。内面はヘラナデを施す。胎土は細粒を多量に混合し、全体に砂状である。器面色調は外面が赤色、内面が褐灰色を呈す。17は、器台形土器であり脚部上半のみ遺存する。現存高3.1cmを測る。貫通孔をもつが、小孔は不明である。器受部、脚部外面はミガキが施される。胎土は長石、石英他細粒を多量に混合する。器面色調は明赤褐色を呈す。18は、器台形土器である。器受部下半、脚部上半を遺存する。現存高は5.3cmを測る。貫通孔をもち、脚部小孔は不明。器受部、脚部外面は丁寧なミガキ、脚部内面はヘラナデによる。胎土は長石他細粒を含む。色調は橙色を呈す。19は、器種が特定できない。底径6.2cmを測る。内外面の整形は、ヘラナデによる。胎土は緻密であり、色調は外面が赤橙色、内面ににぶい橙色である。20は、埴形土器であろうか。底径は3.3cmを測る。内外面の整形はヘラナデによる。胎土は細粒を多量に含む。器面色調はにぶい橙色を呈す。21は、壺形土器複合口縁である。複合部には3本以上を1単位とする棒状浮文をもち、棒状浮文上、複合部下端にヘラ先による押捺を加える。複合部内外面には単節縄文、内面には結節文が施文される。赤彩は認められない。胎土は長石、石英、角閃石などを多量に含む。器面色調は橙色を呈す。22は、壺形土器口縁部である。複合部には単節の縄文が施文され、下端にヘラによる刻目が加えられる。文様帯をのぞき赤彩される。胎土は緻密であり、器面色調はにぶい橙色を呈す。23は、甕形土器であり、口唇部には2方向からの押捺が加えられる。頸部には部分的に段が残される。外面はヘラナデ、内面はヘラナデののち粗いミガキが施される。胎土は長石他大小砂粒を多量に含み、器面色調はにぶい橙色を呈す。

02号住居跡 (fig. 18～21)

遺 構 本遺構の位置する調査区北側は、新期テフラ層が厚く遺構範囲は当初不明確であった。住居堅穴の平面形は、やや隅丸の方形を呈し、長軸4.92m(主軸)、短軸4.80mを測る。面積は、確認面で21.31㎡、床面(周溝部を含む)で19.21㎡を、支柱穴間内区で

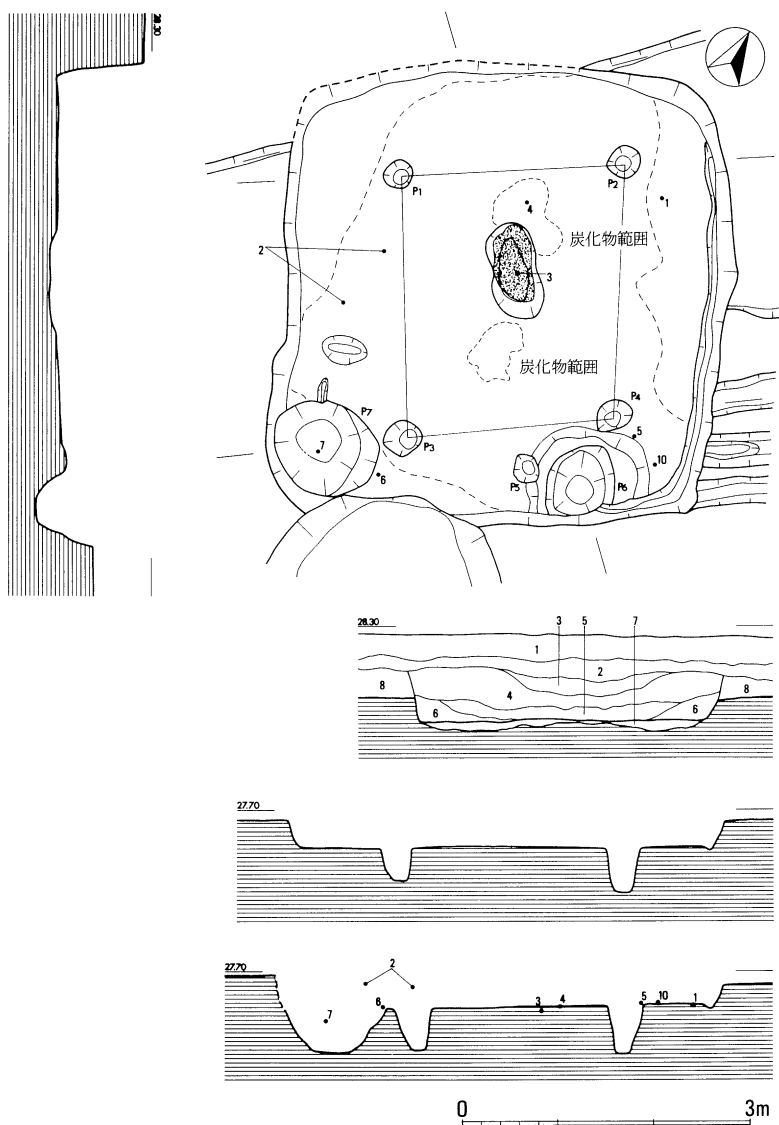


fig. 18 02号住居跡実測図(1/80)



fig. 19 02号住居跡(西より)

穴であり、 P_6 が平面 68×55 cm、深さ31cm、 P_7 が平面 117×97 cm、深さ50cmを測る。なお、 P_6 の周囲は、幅24~48cm、床面より3~8cmほど高くなり、周堤をつくる。周溝は、東壁際のみ検出することができた。土層は、1層は、暗褐色土であり、全体に粒状にロームを混合する。整地層である。2層は、旧表土層であり、黒褐色を呈す。3層は、暗褐色均質土である。4層は、明黒褐色土層であり、まだら状に褐色ブロックを混合する。5層は、暗褐色土であり、しまりがなく粒状を呈す。6層は、

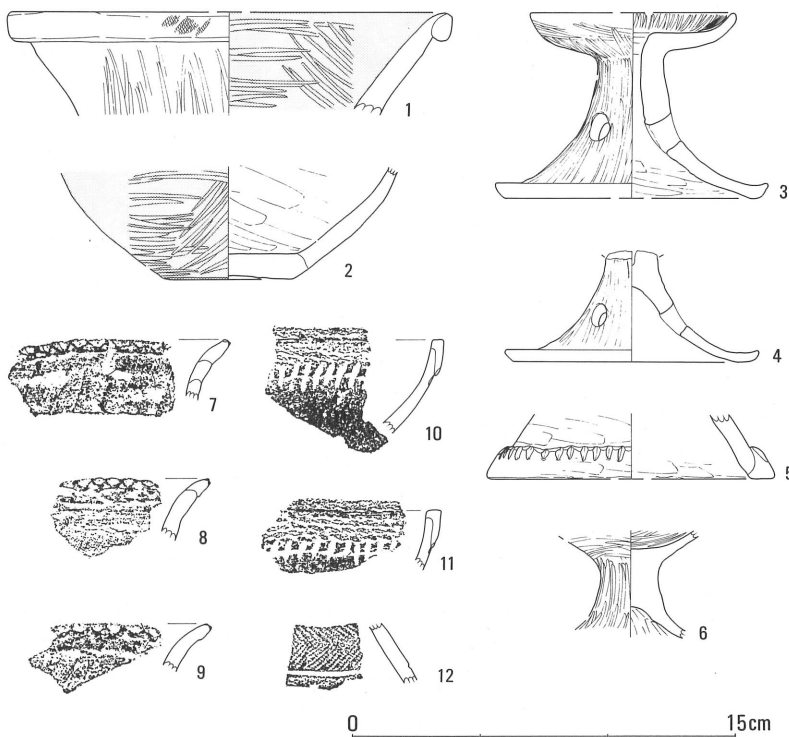


fig. 20 02号住居跡出土土器(1)(1/3)

6.15 m^2 測る。主軸方位は、N-29°-Wである。壁高は、40cm程度を残す。床は貼り床であり、全体に硬質であった。炉は、主軸線上やや東側、出入口部より奥にあり、平面は楕円形を呈す。規模は、平面 103×55 cm、深さ約8cmを測る。底面はよく焼けていた。またその周辺には炭化物、灰が薄く床面上に認められた。 $P_1 \sim P_4$ は支柱穴であり、深さは P_1 が32cm、 P_2 が48cm、 P_3 が46cm、 P_4 が53cmを測る。 P_5 は出入口部の梯子穴と考えられているものであり、20cmを測る。 P_6 、 P_7 は、いわゆる貯蔵

穴であり、 P_6 が平面 68×55 cm、深さ31cm、 P_7 が平面 117×97 cm、深さ50cmを測る。なお、 P_6 の周囲は、幅24~48cm、床面より3~8cmほど高くなり、周堤をつくる。周溝は、東壁際のみ検出することができた。土層は、1層は、暗褐色土であり、全体に粒状にロームを混合する。整地層である。2層は、旧表土層であり、黒褐色を呈す。3層は、暗褐色均質土である。4層は、明黒褐色土層であり、まだら状に褐色ブロックを混合する。5層は、暗褐色土であり、しまりがなく粒状を呈す。6層は、暗黄褐色を呈す。大小ロームブロックを主体とする。7層は、貼り床部分に対応し、黒褐色土を主とし、ロームブロックを混合する。8層は、明黒褐色土層である。

遺物 床面上より出土したものは、1・3・4・5・6・9・10であり、このうち3は、支脚に転用された可能性が考えられる。7は、 P_7 覆土より、他は堅穴内覆土より出土したものである。

1は、壺形土器であり、口縁部1/5を遺存する。口径17.7cmを測る。複合部外面には無節斜縄文が部分的に認められる。

内外面はヘラナデののち粗いミガキが施される。内面は赤彩が認められるが、外面は不明確である。胎土は長石、石英、角閃石、雲母等が認められる。器面色調は外面がにぶい橙色、内面が赤橙色である。2は、埴形土器と考えられ、底部および胴部下半1/4を遺存する。底径は5.3cmを測る。ヘラナデののち粗いミガキ、赤彩が施される。内面はヘラナデによる。胎土は白色細粒を多量に含む。器面色調は外面が赤色、内面が橙色を呈す。3は、器台形土器である。脚部2/3を欠損する。口径8.2cm、器高7.4cm、脚部径10.8cmを測る。貫通孔および脚部に3孔を穿つ。器面の状態はかならずしも良好ではないが、外面、器受部内面がミガキ、脚部内面がヘラナデによる。焼成は不良。胎土は緻密であるが、白色細粒を多量に混合する。器面色調は黄橙色である。4は、器台形土器である。器受部、脚端部1/2を欠く。脚部径10.1cmを測る。脚部に3孔を穿つ。内外面とも器面の状態は



3



4

fig. 21 02号住居跡出土土器(2)

不良であるが、外面はミガキが施される。焼成、胎土、色調は3と類似する。5は、高杯形土器脚端部であり、約1/4周を遺存する。複合部をつくり、脚部径11.4cmを測る。端部には縄文原体の押捺を加える。ただし器面に対する縄文施文はみられない。内外面ともヘラナデが施される。胎土は、赤色粒他大小砂粒を多量に含む。器面色調はにぶい橙色である。6は、小形の高杯形土器であろうか。両端部を欠損する。現存高は4.3cmを測る。脚部内面はナデ、他はミガキによる。小孔は確認できない。胎土は長石他砂粒を若干含むものの緻密であり、器面色調はにぶい橙色を呈す。7は、甕形土器口縁部である。口唇部は上方からの押捺が加えられ、外面には部分的に粘土紐積み上げ痕を残し、また斜方向のヘラナデが認められる。胎土は大小砂粒を多量に含む。器面色調は、外面が橙色、内面が暗赤灰色を呈す。8は、甕形土器口縁部である。口唇部には2方向からの押捺が加えられる。口縁部には1段の粘土紐積み上げ痕を残す。整形痕は明瞭ではないが、内外面ともヘラナデか。胎土は細粒を多量に含む。器面色調は外面が黒色、内面がにぶい橙色を呈す。9は、甕形土器口縁部であり、口唇部には2方向からの押捺が加えられる。また口唇部外面は若干肥厚する。内外面の整形はナデによる。胎土は長石他砂粒を多量に含む。器面色調は外面が褐灰色、内面が黒色を呈す。10、11は、碗形土器ないしは高杯形土器であり、同一個体と考えられる。口唇部、複合部には結節文が施される。また複合部下端には、縄文原体による押捺が加えられる。文様帯以外は赤彩が施される。胎土は白色細粒を多量に含む、器面色調はにぶい橙色である。12は、壺形土器胴部破片である。外面には沈線で区画された単節羽状縄文が施される。赤彩は認められない。胎土は緻密であり、器面色調はにぶい橙色を呈す。

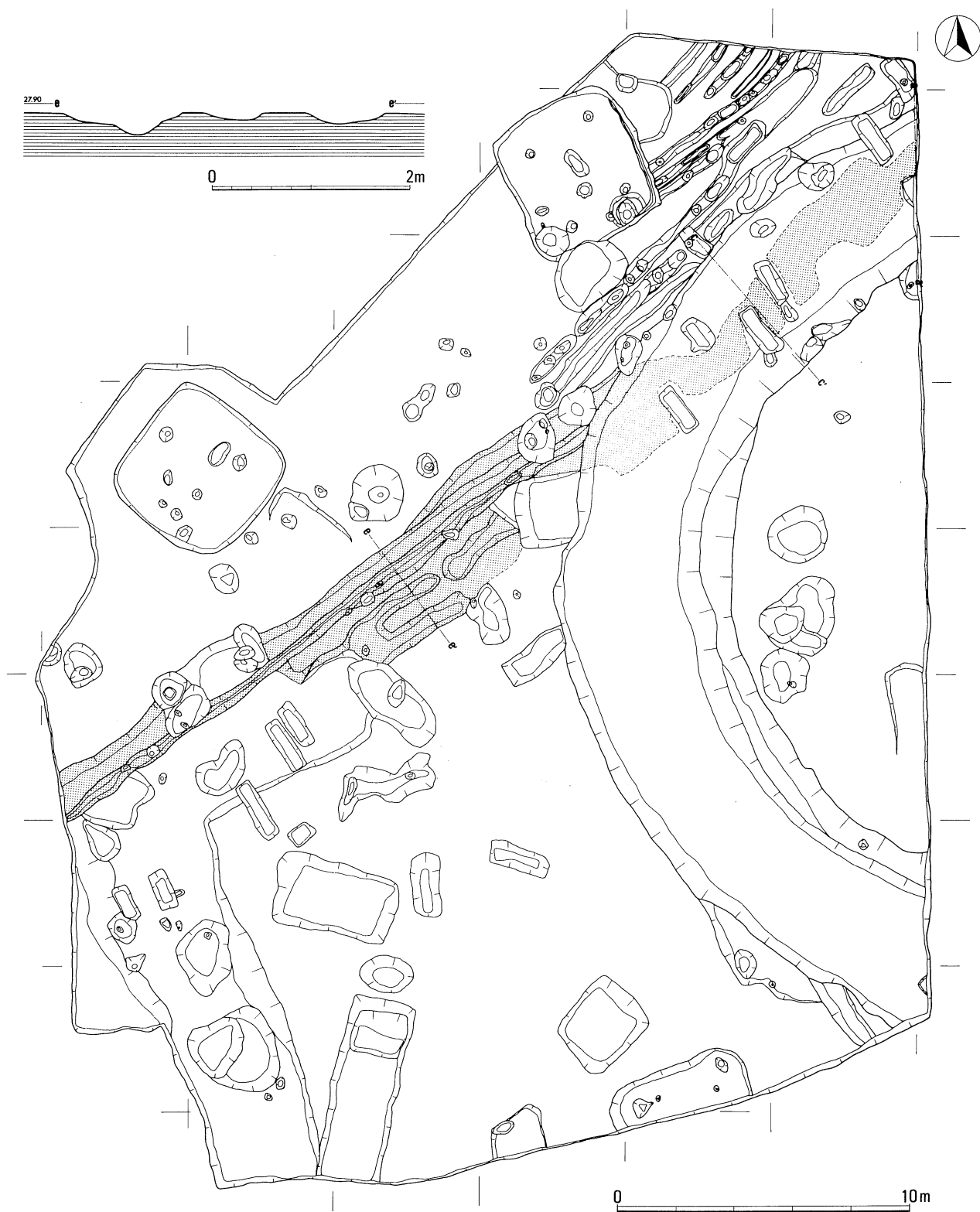


fig. 22 道路跡(1 / 200)

3 道路跡(fig. 11・22)

調査区の北東部より南西に向かって、おおよそN-55°-Eの方向に道路跡が検出された。調査区内全長距離は約36mを測る。平面的には車輪跡と考えられる数条の溝から構成されるが、調査の主眼が古墳および住居跡に限らざるをえなかったため、かならずしも十分な調査を行ってはいない。硬質面については、図示しておいたが、古墳周溝部をのぞき間層もみとめられず、重複関係は明確ではなかった。ただし断面a-a'を基準とした場合、3面からなる重複関係が認められる。ただし最上面のものについては、他では明確ではなかった。したがって図示した硬質面範囲も基本的に下部2面のものである。下部2面の硬質面は、古墳周溝部では前述したように宝永期の火山灰層(1707年)を間層としてはさみ、その年代をおさえることができる。また、最上面の物も約40cmの間層をはさむが、年代的に大きくはなれたものではなく、下部2面の古墳周溝部道路面が他よりレベルが低いため、なんらかの要因によって一気に埋没してしまったと推定される。なお、この道路は、fig. 3にみることができるよう、地境にほぼ対応するものの、明治16年測量の迅速測図(fig. 2)では不明確であり、すくなくとも1961年撮影の空中写真では存在しない。(PL. 1)。

この道路跡にそって、02号住居跡東側に、畝状の溝が数条検出されている。道路跡とその年代の一時期を共有している可能性も考えられる。しかし、おそらく近年のものであろう。

4 遺構外出土の遺物(fig. 23)

1は、広口の壺形土器である。体部上半1/3を遺存する。口径14.2cmを測る。口縁部は複合部をつくり、その下端には、斜め上方より施文した棒状の工具による刺突文がめぐる。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はこれにミガキを加える。胴部外面は、ハケ整形ののち粗いミガキ、内面はヘラナデによる。胎土は、長石、石英を多量に混合する。器面色調は橙色を呈す。2は、高杯形土器であり、脚部上半1/3を遺存する。現存高は5.0cmを測る。小孔孔数は不明である。外面はミガキ、赤彩が施され、内面はヘラナデによる。胎土はやや砂状であり、赤色粒他大小砂粒を混合する。器面色調はにぶい橙色を呈す。

3は、壺形土器である。沈線により区画された2帯の単節縄文帯をもつ。間帯はミガキによるが、赤彩は認められない。内面はヘラナデによる。胎土は長石、角閃石他大小砂粒を混合する。器面色調は橙色を呈す。4は、寛永通宝であり、直径2.53cm、厚さ0.12cmを測る。1・2は、住居跡と時期的に対応する。

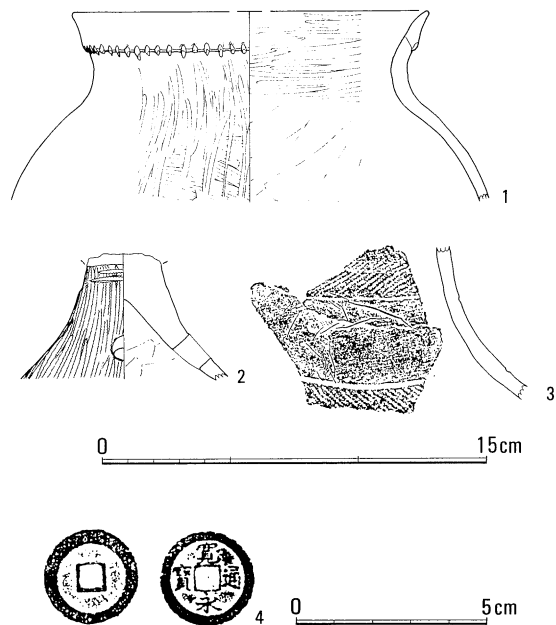


fig. 23 遺構外出土遺物(1/3, 1/2)

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第34集

市原市大厩弁天台遺跡

平成元年 3 月 20 日 印刷

平成元年 3 月 25 日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 辰 巳 鉄 工 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市馬立817番地

Tel. 0436(95)2755

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社

市原市五井5510-1 番地

Tel. 0436(21)4348